



## どう考える

# 小学校の英語教科化

2016年8月28日、中教審は、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」を発表しました。その中で、小学校では、「外国語活動」が中学年に下ろされ、高学年からは英語が正式な教科として2020年度(平成32年度)から実施されることとなっています。「ここでは、小学校における英語の教科化の問題点について、みなさんとともに考えてみたいと思います。

以下、「」内の文章は、すべて「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」あるいは「同(案)」のポイントから引用してあります。

## なぜ小学校で英語を教科化するのですか

文科省は、「グローバル化の急速な進展が、社会のあらゆる分野に影響する現在やこれからの社会の在り方を考えると、外国語、特に国際共通語としての英語によるコミュニケーション能力は、…子供たちが将来どのような職業に就くとしても、生涯にわたる様々な場面で必要とされる」と説明しています。

しかし、現在、実際に仕事で英語を使う人は1〜2%で、ときどき使う人を入れても1割程度と言われています。今後、いくらかグローバル化が進んだとしても、「子供た

## 教科化で、今までとどう変わるのですか

ちが将来どのような職業に就くとしても求められる」という予測は成り立たないと考えられます。

文科省は、「現在高学年において『聞く』と『話す』を中心とした外国語活動を実施しているが、子供たちの『読む』と『書く』ことへの知的要求も高まっている状況にある」とうたった上で、「すべての領域をバランスよく育む教科型の外国語教育を、高学年から導入する」としています。

しかし、現在行われている外国語活動では、『聞く』『話す』を中心とした『コミュニケーション能力の素地を養う』ための授業が行われているからこそ、子どもたちは意欲的に取り組んでいるのです。教科化では、「小学校での00〜700語程度の語彙を習得させる、それも『聞く』『話す』に加えて『読む』『書く』こともできるようにしなければなりません。はるかに難しくなり、英語嫌いが出てくること懸念されます。

ケイション能力の素地を養う」ための授業が行われているからこそ、子どもたちは意欲的に取り組んでいるのです。教科化では、「小学校での00〜700語程度の語彙を習得させる、それも『聞く』『話す』に加えて『読む』『書く』こともできるようにしなければなりません。はるかに難しくなり、英語嫌いが出てくること懸念されます。

## 授業時間が週1時間増えると聞きましたが…

文科省は、「すべての小学校において、外国語科に特化した短時間学習を一律に行うこととする」とは困難な状況にある。「60分授業の設定、長期休業期間における学習活動、土曜日の活用や週あたりのコマ数の増など、地域や学校の実情に応じて増やすようにとしています。いずれにしても、現在でさえ、授業時間がいっぱいであり、これ以上の授業時間増は、子どもと教員にとっての大変な負担増となり、学校生活全体が、さらに窮屈で慌しいものになることが心配されます。

## 英語の専科教員が必要だと思っております

文科省は、「指導者の確保については、…中学校や複数の小学校が連携した研修、中学校と小学校の教員の相互の授

業参加、専科指導を行うなど連携体制を構築」「例えば『英語教育推進リーダー』を中心とした域内研修を行うことなどにより、学級担任はじめ全教員が外国語に触れ、外国語教育が指導できるよう校内研修の充実」として、基本的に担任が中心になって指導することを考えています。担任の負担を今以上に増やすのではなく、英語の専科教員を加配するなどの条件整備が強く求められます。

## なぜ英語の教科化を急ぐのですか

グローバル企業が、世界で通用する企業戦士を必要とし、英語を使える人材育成を学校教育に求めていることが背景にあります。財界の意向を受けて、2013年4月、自民党の「教育再生実行本部」が、グローバルエリートを年に10万人育成することを打ち出しました。同年5月、首相の私的諮問機関「教育再生実行会議」が、第三次提言で小学校の英語教育早期化と教科化を打ち出しました。その後は、文科省が具体化に向けて論議を進めてきたのです。

子どもたちと教員に負担を押しつけ、英語嫌いを生み出す恐れのある小学校における英語教科化については、国民的論議が必要であり、拙速な実施は避けるべきだと考えられます。

# 『学校スタンダードを越えて』

## 子どもへの柔軟な対応・教師の学びと育ち



10月29日(土)に「愛知の教育を考える集い」(愛教労主催)が開催され、記念講演で、『学校スタンダード』を越えて 子どもへの柔軟な対応・教師の学びと育ち」と題して、佐藤 博さん(元東京都中学校教員・法政大学)のお話を聞くことができました。お話の主な内容を紹介します。

### 東京における

### 学校スタンダードの現状

はじめに、東京における学校スタンダードの現状について次のように話されました。

「各地で広がる学校スタンダードは、東京でも例外ではありません。ある学校では、4月のある日に突然、職員室の机の上『〇〇市スタンダード』の紙が配られました。学校や家庭で守るべき『きまり』が書かれています。『児童スタンダード』14項目、『教師スタンダード』12項目、さらに『保護者スタンダード』6項目と続きます。『当り前のこと』が当たり前でできるものとして取り組みましょう。」と書いてあったそうです。

また、佐藤さんは、東京「学びをひろげる会」という若手の先生たちの学習会を開いており、そこに集ってきた若手の先生の「職場で感じていること」の声を紹介してくださりました。▲管理職が教室を巡回して「どうして筆箱をノートの上に置かせないのか」と徹底して守るように言われる。

▲発表の時「はい」「立っ」「です」の形にこだわらずに、テンポのよい授業ができていない。

▲「問題のある子は、しめないといけない」ということを同僚から言われて戸惑っている。守らせる圧力を感じてる。

▲黙働(だまって清掃させること)するようになってきているが、声を掛け合って励まし合って掃除するという方法もあるのではと思う。

▲「こんなことをするために教師になったのか。」と疑問に思う。

### 学校スタンダードのどこが問題か

佐藤さんは、学校スタンダードの問題点として、次の3つのことを指摘されました。

1つ目は、学校スタンダードは、押しつける「なるべし」教師や子どもの「本音」や「自由」や「多様であること」が奪われるということ。集団で生活するところには「きまり」が当然必要です。しかし、それが押しつけられると、返事の仕方などの形式的なことを決められた通りに行っているかどうかわかりに目がいき、教師は子どもの思いや本音を大切にできなくなってしまう。

そして、きまりの多さが息苦しい空間をつくってしまふ、教師として、実態に応じて

柔軟かつ多様に対応する指導力が培われなくなってしまう。

2つ目は、スタンダードが隠れたカリキュラムになっていることです。スタンダードを続けることで、子ども達は、知らず知らず「世の中はあらかじめ決められていて、変えることができない」ということを学んでしまっています。そこからは、物事に対して従順になるか、荒れるか、閉じこもるかしかなくなってしまう。そうならないためには、その

きまりを守ることが何を意味しているのか、どうして守るのかを十分に話し合うことが必要です。

「ネス」学習権宣言の中で、「学習活動は、人々を成り行き任せの客体から、みずからの歴史をつくる主体に変えていくものである」と書かれているように、子どもが主体となれるような学習活動を教師は目指していかねればなりません。

3つ目は、子どもを減点法で見ているということ。こうあるべきというイメージからの出発は、これができていない、あれができていないと子どもを減点法で見られなくなり。そこが問題です。子どもに、何ならできるかを考えて励ましていく。そうすると、子どもを加点法で見ることができま

### 子どもへの柔軟な対応を

どんな教師になるか、何を大事にする教師になるかを考えるとき、スタンダードよりも大事にすることとして、佐藤さんは次の4つのことを話されました。

1つ目は、子どもを何かに出会わせること。歴史であったり科学であったり、心とま

めく学びの世界へいざなう仕事です。

2つ目は、子どもを見出すこと。小学校で『問題児』扱いされていたトットちゃんこと黒柳徹子さんは『この子は面白い!』と書いてくれた先生に出会い、自分らしさを発揮できました。

誰かに見いだされた子、自分の中のつらさや悲しみを共感してもらった子は、自分で乗り越えていきます。多様な子どものよさを認めてやることです。

3つ目は、子どもから大人への旅をする子どもに寄り添って支えること。『どうせおとなか』とか『どうせ世の中こんなもの』と思っている子どもに寄り添い、『どうじゃないよ。捨てたもんじゃないよ。』と実感させること。子どもの失敗やトラブルに対して、教師が子どもの思いや本音を聞き、語り合うことで、子ども自身が主体的に生きていけるようになります。自らも悩める教師、痛みがわかる教師こそが、子どもの伴走者になれる。

4つ目は、子どもに思い出体験をつくらせること。私が若手の時に担任した卒業生が、今でも「先生は、僕たちをいつも大切に思ってくれていた。」と言ってくれます。

失敗ばかりで情けない教師であった自分でしたが、私が願ったこと、試みたことは、子どもに心に残っていました。自分で考えた実践を自由に試みることが保証されていることが大切です。

最後に佐藤さんは、「子どもは時間をかけてゆっくり変わります。失敗も大目に見てもらえる教室で、おらかな学校でのびのびと育つてほしいものです。そして、教師というものは、どんなに苦労がなくても、自分の方から子どもを愛していける人間になることが大切です。」と語られました。